

【修正案】赤字が修正箇所です。

第4学年1組 社会科学学習指導案

授業日 平成26年9月30日(火) 公開授業A
授業者 附属新潟小学校 教諭 大矢 和憲
会場 4年1組教室

1 単元名 「住みよく環境にやさしいまちづくり」～ごみから資源へ～

2 本単元の価値

本単元は、学習指導要領第3学年及び第4学年の内容(3)に準拠して設定したものである。

- (3) 地域の人々の生活にとって必要な飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、これらの対策や事業は「地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを考えるようにする。」
ア 飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理と自分たちの生活や産業とのかかわり
イ これらの対策や事業は計画的、協力的に進められていること。
(内容の取扱い)
(3) 内容の(3)については、次のとおり取り扱うものとする。
イ 「廃棄物の処理」については、ごみ、下水のいずれかを選択して取り上げ、廃棄物を資源として活用していることについても扱うこと。
(5) 内容の(3)及び(4)にかかわって、地域の社会生活を営む上で大切な法やきまりについて扱うものとする。

そのうち、「地域のごみの処理」についての学習が本単元である。

本単元では、普段の生活で当たり前に出しているごみが衛生的に処理される過程や、行政と地域、市民とが、廃棄物処理のきまりを基に、計画的・協力的にごみの減量と廃棄物の資源化に取り組んでいること、廃棄物が大切な資源として活用されていることなどを学習する。

新潟市では、平成20年を「地球環境元年」と位置付け、環境にやさしい資源循環型社会の構築を進めるために、「新ごみ減量制度」を導入した。このことは、まさに持続可能な社会の実現を目指した政策であり、平成25年には「環境モデル都市」に選定されるなど、新潟市の取組と成果は全国的なモデルとなっている。

「新ごみ減量制度」では、ごみは「いらぬもの」ではなく「大切な資源」だという考えの基、「ごみは有料・資源は無料」とし、ごみの減量とリサイクルの推進を目指している。行政や関係機関は、計画的、協力的にごみの処理と資源物の回収、及び、地域や市民への啓発活動を行っている。また、地域では、「クリーンにいがた推進委員」を始め、自治会等で協力して、ごみや資源物の適切な回収、及び生活環境の保全に取り組んでいる。さらに、地域の大型店舗などでは、資源物の回収に協力している。そして、市民は法やきまりに基づき、それぞれの家庭でごみと資源物とを分別して排出したり、ごみを減らす工夫や努力をしている。このように、廃棄物の処理に従事する関係機関や地域の人だけではなく、地域の人々(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力をしてごみの減量と廃棄物の資源化に取り組んでいる結果、新潟市ではごみの量が大幅に減少し、リサイクル率が大きく向上しているのである(人口50万人以上の都市中で2位)。

このように、地域の人々で協力していることが、ごみの少ない環境にやさしいまち(よりよい地域社会)を実現していることをとらえさせることで、地域の一員としてよりよい社会の形成に参画する資質や能力を培うことができる単元である。

3 本単元で学びをつないだ姿と学びをつなぐ力

本単元では、**ごみの少ない環境にやさしいまちづくりの概念を獲得する子ども**を目指す。具体的には、ごみの量が大幅に減少した事実について追究することを通して、「**廃棄物の処理に従事する関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちだけではなく、地域の人々(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力することで、ごみの少ない環境にやさしいまちになることが分かった。だから、わたしもごみと資源物の分別をしっかりと協力していきたい**」(Cn)などと考える姿である。この姿が、本単元で学びをつないだ姿である。

また、本単元における学びをつなぐ力は、「新潟市全体のごみの量が減っている事実」について、これまでの学習で得た認識や生活経験(課題解決に必要な既存事項)を基に、その要因を多面的・多角的に考えることと、それらを総合して要因の結論(課題解決に必要な情報)を考えることである。

子どもは、廃棄物の処理に従事する関係機関やそこで働く人々、及び、地域の人たちが、「衛生的に住みよいまちづくり」や「環境にやさしいまちづくり」のために、廃棄物の回収や処理を計画的・協力的に行っていることを学習してきた。そして多くの子どもは、「毎日たくさん出ているごみを、廃棄物の処理に従事する関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちが、工夫や努力、協力をして適切に回収と処理をしているおかげで、**市民がぐらしやすい環境にやさしいまちになっている**」(C0)ととらえている。このような子どもが目指す姿になるには、これらの人たちだけでなく、自分を含めた市民一人一人の工夫や努力、協力がよりよいまちづくりにつながっていることに気づき、地域の人々でよりよいまちづくりにしていることをとらえる必要がある。そこで、以下のように働き掛け学びをつなぐ力を発揮させていく。

まず、人口がほとんど変わっていないのにごみの量が大幅に減っている事実を示すことで、子どもの既有的の見方や考え方を揺さぶり、ごみの少ない環境にやさしいまちになっていること(ごみ問題がよりよく改善されていること)について追究する学習問題を設定させる。

次に、学習問題を設定した子どもに、「**新ごみ減量制度**」に関する資料(対象)を提示し、資料から分かったことや考えたことを付箋に書かせる(個人作業)。このとき子どもは、**関係付けるすべ**

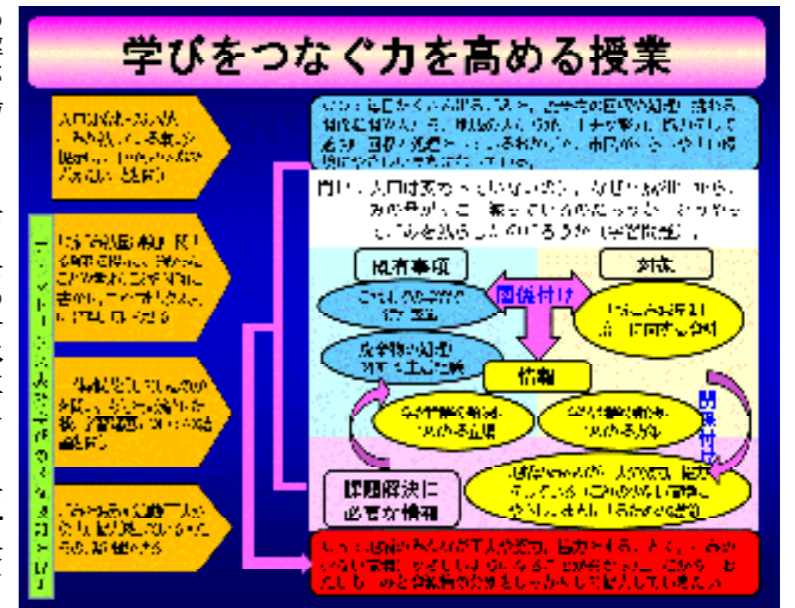
用いて資料を読み取り、これまでの学習で得た認識や生活経験(課題解決に必要な既存事項)を想起しながら、学習問題の解決につながる立場や方策(情報)を見いだしていく。また、小グループでコア・マトリクス表(※情報の整理・分析を促し、比較・関係付け・総合して見たり考えたり、多面的・多角的に考えたりできるようにするため、また、思考を視覚化し、メタ認知させるための補助教材)を使って情報を共有させることで、子どもは、**分類するすべ**を用いて、ごみの減量に関する立場や方策を視点に学習問題の解決につながる情報を整理する。

さらに、「ごみの量を減らすために、誰がどうしているのか」と問い、考えを交流させる。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、学習問題の解決につながる立場と方策(情報)とを関係付け、市の取組や回収・処理に携わる人、地域の人や店舗、そして自分を含めた市民などの工夫や努力を挙げる。

このように子どもに、学習問題についての結論を問う。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、様々な立場と方策とを総合して考え、「ごみや資源物を回収・処理している人や、地域の人(自治会、クリーンにいがた推進委員、店舗)だけでなく、地域の人々(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力していることで、ごみの少ない環境にやさしいまちになっているんだ」と、ごみの少ない環境にやさしいまちにするための結論(課題解決に必要な情報)を導き出す。

最後に、ごみを減らす活動をしている人たちの話(市の担当者・クリーンにいがた推進委員・保護者代表)を聞かせ、子どもが考えた結論の妥当性を確かめさせる。子どもは**関係付けるすべ**を用いて、ゲストティーチャーの話(C0を想起させる話)と、自分たちが考えたごみの少ない環境にやさしいまちにするための結論(課題解決に必要な情報)をつないで再構成し、目指す姿になる。

また、日常的に「社会科学学習日記」(宿題)を書かせるように指導する。こうすることで、子どもは、方法知としての社会的な見方や考え方をメタ認知し、以降の学習においても学び方や考え方を活用して学習していくようになる。



4 指導計画 全16時間(480) ※単元カード参照

5 指導の構想

子どもは、これまでの学習において、関係機関や回収と処理をしている人たちによって、廃棄物が適切に回収・処理されていることや、地域の人たちが協力して廃棄物の適切な回収、及び生活環境の保全に取り組んでいることなどを学習している。子どもは、「毎日たくさん出ているごみを、廃棄物の処理に携わる関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちが、工夫や努力、協力をして適切に回収と処理をしているおかげで、**市民がぐらしやすい環境にやさしいまちになっている**」(C0)ととらえている。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1
人口はほとんど変わらないが、ごみの量が減っている事実を提示し、これからみんなで考えたいことを問う。

ごみの少ない環境にやさしいまちづくりについて考えさせていくために、まず、平成17年から平成25年までの新潟市の人口の推移を表したグラフ(資料①)を提示し、気付いたことを問う。子どもは、新潟市の人口が80万人以上で多いことや、人口はほとんど変わっていないことに気付く。

そのような子どもに、平成17年から平成25年までの新潟市のごみの量の推移を表したグラフ(資料②)を段階的に提示する。まずは、平成17年のごみの量と平成25年のごみの量、平成25年に「環境モデル都市(住みよく環境にやさしいまち)」になった事実を提示し、驚いたことや疑問に思ったことを問う。子どもは、ごみの量が大幅に減ったことに驚き、「どうしてごみの量がこんなに減ったのだろうか」「いつから減ったのだろうか」と疑問を感じる。このような子どもに、グラフ全体を提示し、再度驚いたことや疑問に思ったことを問う。グラフからは、平成20年からごみの量が大幅に減ったことが読み取れる。子どもは、2つのグラフ(事実)を見て、「人口はほとんど変わっていないのに、なぜごみの量が減っているのか」「どうして平成20年から大幅にごみの量が減ったのか」と、驚きや疑問、問題意識を感じる。

そのような子どもに、これからみんなで考えたいことを問う。子どもは、**比較するすべ**や**関係付けるすべ**を使って驚きや疑問を焦点化し、「**人口はほとんど同じなのに、なぜごみの量がこんなに減ったのだろうか。何をしたら減ったのだろうか**」などと、ごみの少ない環境にやさしいまちづくりについて追究する学習問題を設定する。

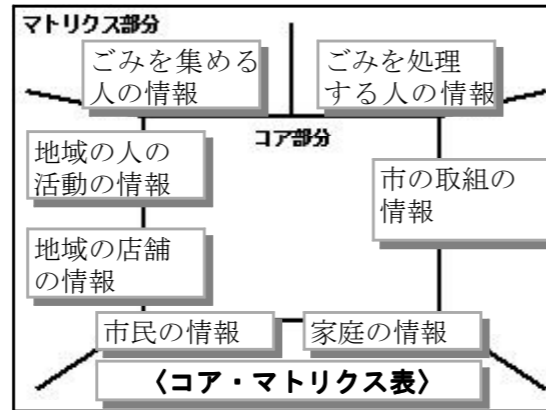
その後、ワークシートに自分の初発の考えを記述させる。このとき、ごみが減っている事実や驚きや疑問を感じ、学習問題についての初発の自分の考えを記述できた子どもを問いをもった姿とする。

また、この時点では、子どもはまだこれまでの学習で得た認識や生活経験から、最も関係しそうな原因を考えているため、一面的な考えを記述している状態である。

働き掛け2
「新ごみ減量制度」に関する資料を提示し、資料から分かったことや考えたことを付箋に書かせ、コア・マトリクス表に整理して貼らせる。

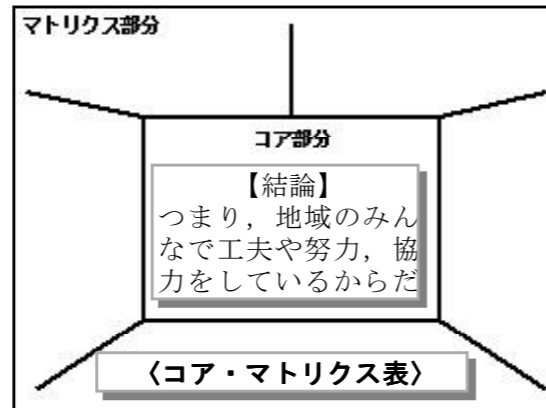
根拠となる事実を明らかにして多面的・多角的に考えさせるために、「どのようなことが分かれば考えられそうか」と問う。子どもは、学習問題を解決するためにはごみが減った原因や平成20年からの変化が分かれば考えられそうだと考え、それらが分かる資料を求める。そのような子どもに、「新ごみ減量制度」に関する資料(資料③:対象)を提示し、まずは、資料から分かったことや考えたことを付箋に書かせる(個人作業)。子どもは、関係付けるすべを用いて資料を読み取り、これまでの学習で得た認識や生活経験(課題解決に必要な既有事項)を想起しながら、学習問題の解決につながる立場や方策(情報)を見だしていく。

その後、小グループにコア・マトリクス表(右図)を配付し、似ている付箋で整理してマトリクス部分に貼らせる(グループ活動)。子どもは、分類するすべを用いて、ごみの減量に関する立場や方策を視点に学習問題の解決につながる情報を整理する。



働き掛け3
誰がどうしているのか問い、考えを交流させた後、学習問題についての結論を問う。

環境にやさしいまちづくりのための結論を考えさせるために、まず、「資料から、誰がどうしていることが分かりましたか」と問い、考えを交流させる。立場と方策を問うことで、子どもは、関係付けるすべを用いて、学習問題の解決につながる立場と方策(情報)をつなぎ、市の取組や、回収・処理に従事している人、地域の人や店舗、そして自分を含めた市民などの工夫や努力を挙げる。このとき、子どもは、複数の立場から、ごみを減らすことにつながる要因(方策)を多面的・多角的に考えている。



このような子どもに、総合して考える思考を促し、考えの根幹にあたる概念に気付かせるために、学習問題についての結論を問い、コア・マトリクス表のコア部分の考え(結論)を記述させる。その後、考えを学級全体で交流させる。子どもは、関係付けるすべを用いて、様々な立場と方策とを総合して考え、「ごみや資源物を回収・処理している人や、地域の人(自治会、クリーンにいがた推進委員、店舗)だけでなく、地域の人(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力をしていることで、ごみの少ない環境にやさしいまちになっているんだ」と、ごみの少ない環境にやさしいまちにするための結論(課題解決に必要な情報)を導き出す。全体での考えの交流を通して、子どもが納得のいく結論になったら、次のように働き掛ける。

働き掛け4
ごみを減らす活動をしている人たち(ゲストティーチャー)の話聞かせる。

子どもが考えた結論の妥当性を確かめさせるために、ごみを減らす活動をしている人たち(市の担当者・地域のクリーンにいがた推進委員・保護者代表)の話聞かせる。この場面では、子どもを交えて「ごみから資源へ」というテーマで、質問や意見交流をするようにする。その中で、それぞれの立場の人たちが、ごみを減らし、資源化する工夫や努力、協力をしていることが分かるようにする。また、市の担当者からは、「平成26年のごみの量が減ることを期待している」と投げ掛けてもらう。子どもは、ゲストティーチャーの話聞き、自分たちが考えた結論の妥当性を確かめる。

その後、学習問題について、大切なことと、分かったこと考えたことを説明させる。子どもは関係付けるすべを用いて、ゲストティーチャーの話(C0を想起させる話)と、自分たちが考えたごみの少ない環境にやさしいまちにするための結論(課題解決に必要な情報)をつなぎ、再構成し、「廃棄物の処理に従事する関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちだけではなく、地域の人(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力することで、ごみの少ない環境にやさしいまちになることが分かった。だから、わたしもごみと資源物の分別をしっかりと協力していきたい」(Cn)などととらえ、ごみの少ない環境にやさしいまちづくりの概念を獲得する子どもになる。

6 本時の構想 (本時 14/16時間 45分授業: 3Q)

(1) わらい

比較するすべや関係付けるすべを用いて、ごみの少ない環境にやさしいまちになっている事実について追究することを通して、廃棄物の処理に携わる関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちだけではなく、地域の人(自分を含めた市民)が工夫や努力、協力をしている結果であることに気付き、ごみの少ない環境にやさしいまちづくりの概念を形成することができる。

(2) 主張(展開) 3Q (45分)

このような子どもに (C0)

- 市全体で排出される1日(1年)のごみの量を知っている。
- 自分の家庭や町内の廃棄物の出し方(きまりや工夫)を知っている。
- 見学や調査を通して、廃棄物の回収や処理のされ方を知っている。
- 廃棄物が、きまりに基づいて関係機関で計画的・衛生的に処理されていることを知っている。
- 廃棄物の回収や処理に携わる人たちの工夫や努力・苦勞について知っている。
- 自治会やクリーンにいがた推進委員の人たちが、ごみや資源物の適切な回収と生活環境の保全のために、工夫や努力、協力をしていることを知っている。
- 地域の大型店舗などで、資源物の回収を行っていることを知っている。
- 廃棄物の処理に携わる関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちが工夫や努力、協力をして適切に廃棄物の回収と処理をしているおかげで、よりよい生活を送ることができることを知っている。
- 新潟市で排出されるごみの量が年々減少していることや、平成20年からごみの量が大幅に減ったことを知らない。

このように働き掛けると【働き掛け1】

- 説明「みんなは、毎日たくさんのごみが出ていて、それらが毎日集められて処理されていることを学習してきましたよね」
- ・ 説明「今日は、みんなにこのような資料をもってきました。どんな資料ですか」「どうなっていると思いますか」
- ※ 資料①:「新潟市の人口の推移(年)を表したグラフ」を提示する。
- ※ グラフはマスキングをして、少しずつ見せていく。
- ・ 指示「気付いたことを発表しましょう」
- ・ 説明「新潟市の人口は、10年前からあまり変わっていないのですね。今日はもう一つ資料をもってきました。どんな資料ですか」「どうなっていると思いますか」
- ※ 資料②:「新潟市のごみの量の推移(年)を表したグラフ」を提示する。
- ※ グラフはマスキングをして、少しずつ見せていく。
- 指示「グラフを見て、驚いたことや疑問に思ったことを発表しましょう」
- ※ 補助発問:「どうしてそう思ったのか」「どうだと思っていたのか」と理由を問う。
- ※ すでに考えを話す子どもには、今どんなことについて考えているかを問う。
- ※ 子どもの驚きや疑問を黒板に記す。
- 発問「みんなはこれからどんなことを考えたいですか。どんな学習問題ができそうですか」「これからみんなで考えたい学習問題はこれでもいいですか」
- ※ 学習問題を黒板に書き、ワークシートを配付する。
- 指示「自分が2つのグラフを見て驚いたことや疑問に思ったことと、学習問題についての今の自分の考えをワークシートに書きましょう」

このようになり (C1)

- 資料①を見て思ったことを発表する。
- ・ 新潟市の人口のグラフだ。新潟市の人口はずっと80万人以上で多い。
- ・ 新潟市の人口はほとんど変わっていない。
- ・ ごみの量はどうなっているのかな。
- 資料②を見て、驚いたことや疑問に思ったことを発表する。
- ・ ごみの量がすごく減っていてびっくりした。
- ・ 人口はほとんど変わっていないのに、なんでごみの量が減っているのだろうか。
- ・ どうして平成20年からごみの量がすごく減ったのだろうか。
- ・ どうやったらごみの量が減ったのだろうか。
- 驚きや疑問、問題意識から学習問題をつくる。
- ◎ 「人口はほとんど同じなのに、なぜごみの量がこんなに減ったのだろうか。何をしたら減ったのだろうか」(学習問題)
- 驚きや疑問と自分の考えをワークシートに記述する。
- ・ ごみを集めたり処理したりしている人たちが選別を頑張っているからじゃないかな。
- ・ ごみの集め方を変えたからごみの量が減ったんじゃないかな。
- ・ ごみを資源にしたり再利用したりしているからじゃないかな。
- ・ 市民がごみを少なくするように工夫しているからじゃないかな。
- * 検証0: ごみが減っている事実には驚きや疑問を感じ、初発の自分の考えを記述できた子どもを問いをもった姿とする。

このように働き掛けると【働き掛け2-①】

- 発問「今、どのようなことが分かれば学習問題について詳しく考えられそうですか」「どんな資料がほしいですか」
- ・ 説明「なるほど、みんなはそのように考えているのですね。そう言うと思って、先生みんなのためにステキな資料を用意してきましたよ」
- ※ 資料③:「新ごみ減量制度に関する資料」を配付する。
- 指示「資料を調べて分かったことや考えたことを、一つ一つ付箋に書きましょう」
- ※ 付箋を一人一人に配付する。

このようになり (C2-①)

- 学習問題について考えるために必要な情報について考える。
 - ・ごみの量が減った原因が分からないから、原因が分かる資料がほしい。
 - ・何かが変わったことが分かる資料がほしい。
 - ・どうやってごみを減らしたのかを考えられる資料がほしい。
- 資料③を調べて、分かったことや考えたことを付箋に書く。
 - ・平成20年から「新ごみ減量制度」が始まってごみの集め方が変わった。
 - ・市がいろいろなチラシや本でごみの減量を呼び掛けている。
 - ・市の公共施設でも資源物を集めている。
 - ・こうやって市がごみと資源物とを分けて集めているから、ごみの量が減ったんじゃないかな。
 - ・ごみを集める人が、ごみと資源物とにきちんと分けられているかチェックをして集めていた。
 - ・ごみ処理場やプラスチック処理場で、ごみと資源物が混ざっていないか選別して処理していた。
 - ・自治会やクリーンにいがた推進委員の人が、ごみの出し方を点検したり、指導したりしているから、ごみの出し方がよくなって量が減ったと思う。
 - ・お店でペットボトルなどの資源物を集めているから、ごみが減ったんだと思う。
 - ・ごみ袋が有料だから、ごみを出す人がごみを少なくしようと工夫してごみの量が減ったと思う。
 - ・市民がきちんとごみと資源物とに分別して捨てるようになったから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・ぼくの家でも分別をしっかりしているから、ごみの量が減ったのだと思う。

ここから本時

このように働き掛けると【働き掛け2-②】

- 説明「付箋紙にたくさん書きましたか。他の人はどんなことを書いているでしょうね」
- ・ 指示「これから班にコア・マトリクス表を配ります。班のみんなで相談して、似ていることが書いてある付箋で分けて、マトリクス部分に貼っていきましょう。また、どういう分け方をしたのかを、ペンで書いておきましょう」
 - ※ 各班にペンと拡大したコア・マトリクス表を配付する。
 - ※ 補助発問：「比べたりつなげたりしたときは、矢印を書いていきましょう」
 - ※ 補助発問：机間巡視をして、「なぜそのように考えたのか」「どのようなことが考えられそうか」「誰のことなのか」と問う。
 - ※ 机間巡視をして、学習問題の解決につながる複数の立場や方策（情報）が書かれていたら、次の働き掛けを行う。

このようになり (C2-②)

- 学習問題の解決につながる立場や方策（情報）をグループで整理・共有する。
 - ・これはごみを集めている人に関係しているから一緒だね。
 - ・これはごみを選別している人のことかな。
 - ・これはごみの集め方が（きまり）が変わったことだね。
 - ・これは市がごみを減らすためにやっていることだね。
 - ・これは地域のクリーン新潟推進委員がしていることで、これはお店がしていることだね。
 - ・**3Rをしていることで一緒じゃないかな。**
 - ・これは自分たちの家の工夫なんじゃないかな。
 - ・市民に関係していることだよ。

このように働き掛けると【働き掛け3-①】

- 指示「どの班もマトリクスにいろいろな情報が集まりましたね。それでは、資料から誰がどうしていることが分かりましたか。分かったことや考えたことをみんなで話し合しましょう」
 - ※ 発表された考えを全体のコア・マトリクス表に記述する。
 - ※ 補助発問：「どうしてそう考えた（言える）のですか」「誰がどうしているのですか」
 - ※ 補助発問：「～さんは、このことをつなげて考えたのですか」「みなさんは～さんの考えに納得ですか」

このようになり (C3-①)

- 全体で分かったことや考えたことを交流し、学習問題の解決につながる立場や方策を明らかにしていく。
 - ・市がごみの集め方を細かくして、ごみと資源物とを細かく分けて集めるようにしたから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・市がごみと資源物の分け方を説明する本やカレンダーをつくって配ったり、きちんと分けて出すことを呼び掛けたりしているから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・市の公共施設でも資源物を集めているから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・それだったら、スーパーなどでも資源物を集めている。
 - ・ごみを集めている人が、ごみと資源物が混ざっていないかチェックして集めているから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・ごみや資源物の処理場の人が、ごみと資源物とを選別しているから、ごみの量が減ったのだと思う。
 - ・地域の人が、ごみのきまりを守ってごみを出しているかチェックしたり、注意をしたりしているから、ごみを出す人たちが気を付けるようになって、それでごみの量が減ったのだと思う。
 - ・市民がごみと資源物ときちんと分けて出すようにしているから、ごみの量が減ったのだと思う。

- ・ぼくの家でもそうなんだけど、**市民が3Rをしてなるべくごみを出さないように工夫しているから、ごみの量が減ったのだと思う。**

* 検証①： _____ のような学習問題の解決につながる立場と、 _____ のような学習問題の解決につながる方策とをつないで考えている姿が見られたら「関係付けるすべ」を使っていると判断する。

このように働き掛けると【働き掛け3-②】

- 発問「みんなはこのような学習問題をつくりましたね。それでは、新潟市のごみの量が減っているのは、一体誰がどうしているからでしょうか」
 - ・ 指示「コア・マトリクス表のコアの部分に書きたいことをワークシートに書きましょう」
 - ・ 指示「コアの部分についてみんなで話し合しましょう」
 - ※ 補助発問：「どうしてそう考えた（言える）のですか」
 - ※ 補助発問：「～さんは、このことをまとめて考えたのですか」「みなさんは～さんの考えに納得ですか」
 - ・ 説明「なるほど、みんなはこのように考えているのですか。この考えに納得できますか」
 - ※ 子どもが納得できる結論になったら、次の働き掛けを行う。

このようになり (C3-②)

- 学習問題についての結論（コア部分）を考える。
 - ・ ごみや資源物を回収・処理している人や、地域の人（自治会、クリーンにいがた推進委員、店舗）だけでなく、地域の人（自分を含めた一人一人）が工夫や努力、協力していることで、ごみの少ない環境にやさしいまちになっている。

* 検証①： _____ のように、様々な立場と方策とを総合して、学習問題について考えている姿が見られたら「関係付けるすべ」を使っていると判断する。

本時ここまで

このように働き掛けると【働き掛け4】

- 説明「前の時間、みんなは学習問題についてこのように考えましたね」
 - ※ 学習問題のフリップと、前時のコア・マトリクス表を提示する。
- ・ 説明「ところで、みんなが考えたことは正しいのでしょうか」
- ・ 説明「実は、今日は、みんなのためにスペシャルなゲストをお呼びしています。新潟市役所の〇〇さんと、旭水町内自治会の青木さんと、新潟市民代表の〇〇さんです」
- ・ 説明「今日はこの3人の方々に質問をしたり、お話をしてもらったりする会にしましょう」
 - ※ ゲストティーチャー（以下：GT）を紹介する。
- ・ 指示「早速聞いてみたいことがある人は発表しましょう」
 - ※ ここからは、子どもとGTの話をつなぐコーディネーターの役割をする。
 - ※ 市の担当者からは、最後に「平成26年のごみの量が減ることを期待している」と投げ掛けてもらう。
- ・ 発問「GTの話聞いて、みんなはどう思いましたか」
- 指示「学習のまとめとして、ごみの少ない環境にやさしいまちにするために大切なことと、自分の考えをワークシートに書きましょう」

このようになる (Cn)

- GTの話聞き、自分たちの考えの妥当性を確かめる。
 - ・ きっとGTも、ぼくたちと同じように考えているはずだ。
 - ・ やっぱり、みんなでごみを減らす工夫や努力、協力することが大切なんだな。
 - ・ やっぱり、みんなでごみと資源物とを分別することが、ごみの少ない環境にやさしいまちにすることにつながっているんだな。
- 学習のまとめとして、大切なことと自分の考えをワークシートに記述する。
 - ・ 廃棄物の処理に従事する関係機関や回収と処理をしている人たち、地域の人たちだけでなく、地域の人（自分を含めた市民）が工夫や努力、協力することで、ごみの少ない環境にやさしいまちになることが分かりました。だから、わたしもごみと資源物の分別をしっかりとして協力していきたいと思っています。

7 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、考えるすべを用いながら、既存事項を基に課題解決に必要な情報を収集・判断することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、関係付けるすべを用いながら、学習問題の解決につながる立場と方策とを総合して、ごみの少ない環境にやさしいまちにするための結論を考えることができたかどうかを、発言やコア・マトリクス表（またはワークシート）の記述から検証する。
- ② 働き掛け4を受けて、 _____ のように、ごみの少ない環境にやさしいまちづくりの概念を獲得できたかどうかを、ワークシートの記述から検証する。

※上記①②全ての検証を通過したら、表れありと判断する。

